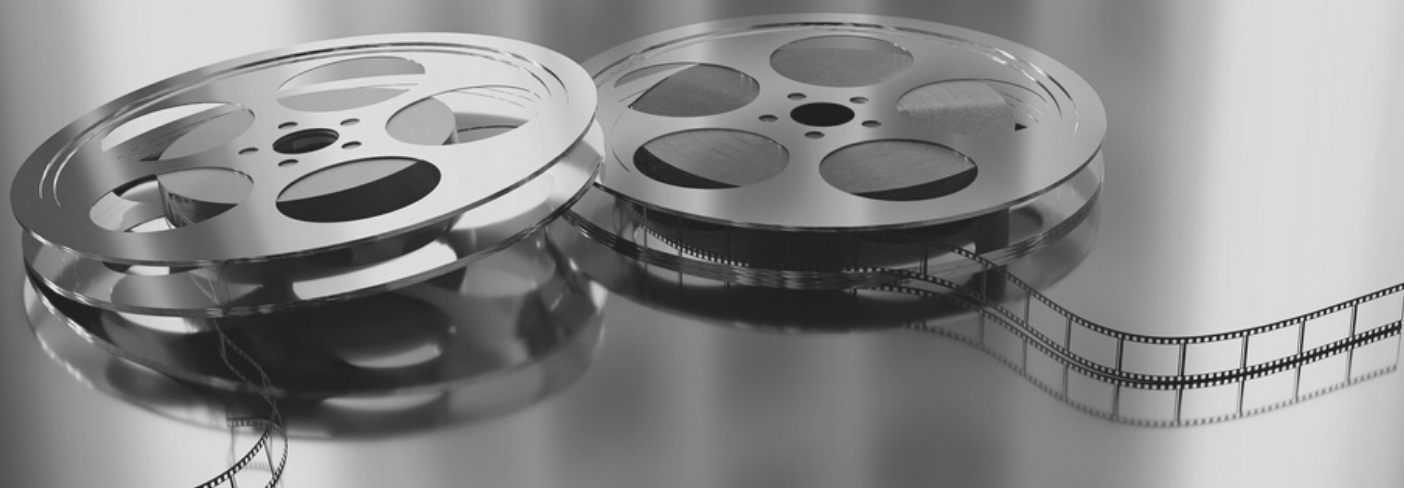


シネマ通信

第8号 (2023年4月21日)



幻滅

第8回鑑賞作品

監督・脚本：グザヴィエ・ジャンリ

原作：オノレ・ド・バルザック

人間喜劇の一遍「幻滅—メディア戦記」

出演：バンジャン・ヴォワザン (Summer of 85)

ヴァンサン・ラコスト (アマンダと僕)

グザヴィエ・ドラン (カナダの俳優、映画監督)

19世紀前半、パリ。

退廃の都で

夢見る青年は何を学び

何を捨てたか

時代は19世紀前半のフランス。恐怖政治が終焉したパリでは宮廷貴族が復活し、自由に享樂的な生活を謳歌していた。詩人として成功することを夢見る青年リュシアンは、彼を熱愛する貴族の人妻ルイズと共に、憧れのパリに出奔する。しかし、田舎育ちの彼らは、社交界では笑いものにされるだけだった。生活のためにやっと手にした新聞記者の仕事でも、マスメディアの現実は厳しかった。当初は、金のために魂を売る同僚たちに憤然とするリュシアンだったが…。フランスのアカデミーといわれるセザール賞で15部門にノミネート。作品賞他、史上最多7冠を達成した作品です。



このパリでは、悪質な人間ほど高い席に座る

About Them

バルザックが「人間喜劇」の一遍、「幻滅-メディア戦記」を書きあげたのは44歳の時。20代のソルボンヌ大学生グザヴィエ・ジャノリは、初めてこの傑作を読んだときから、いつしか自身の手で映画化したいと願っていた。「偉大なるマルグリッド」「情痴」と、佳作を放ってきた同監督が、満を持して取り組んだのが本作といえるでしょう。

さらに興味深いのが、19歳にして「マイ・マザー」の監督、主演、脚本を手がけたグザヴィエ・ドランが、主人公を誠実に見守る作家として登場すること。

2013年、監督・主演の「トム・アット・ザ・ファーム」で、ヴェネツィア映画祭の国際映画批評家連盟賞を受賞。2014年には「マミー」でカンヌ映画祭審査委員賞を獲得し、翌年には審査員として参加。2016年には「たかが世界の終わり」で、カンヌ映画祭グランプリに輝くなど、近年は監督として世界的に注目されるドランですが、元は子役からたたき上げた根っからの俳優。「トム・アット・ザ・ファーム」の孤独な美少年が、どんな”大人の都会人”を演じるか楽しみです。



About Something

昨秋のギリシャ旅行で味をしめ、この2月～3月に南イタリアに行ってきました。ナポリ、ポンペイ、アマルフィー、マテーラ、アルペロベッロ、シシリーと巡りましたが、やはり、映画に縁が深いのは断然シシリーですね。グラン・ブルー、ニュー・シネマ・パラダイス、マレーナ、山猫、ゴッド・ファーザーと、名画の名前が、ガイドさんの口からポンポンと出てきます。何の変哲もない田舎道でも、ここがニュー・シネマ・パラダイスの村ですといわれると、急に特別に見えてくるから不思議です。意外だったのは、長靴のつま先から、さらに先に位置するこの島に、ギリシャ神殿の遺跡が数多くあること。紀元前にギリシャ人が植民市を創設。地元民は奴隷として働かされたそうです。同じイタリアでも北と南では全く文化圏が違うとはよくいわれますが、共通しているのは、そのファッションセンスの素晴らしさ。ちょっとした地方都市でも、ブティックを覗けば目を引くものが一杯。食器や小物類も素敵です。買って帰りたいものばかりで、大きいスーツケースを持ってこなかったことが悔やまれました。もう一つ意外だったのは、シシリー在住？十年の日本人ガイドさんがポツリといった一言。「シシリーの人って、最初は陽気で優しいと思ったけど、本当は暗くて冷たいのよ」とのこと。まさしく”これは個人の感想です”ということになりますが、被支配の歴史が長い国とそうでない国とでは、国民性に違いが出てくるように思います。

精緻なモザイクで飾られた大聖堂も、手作り感あふれる洞窟教会も印象的でしたが、我が胸が一番ときめいたのは、マフィア（と私は確信している）の紳士とすれ違ったときでした。高価そうな毛皮をフワリとまとい、高価そうな犬を連れて歩く姿に、ついつい目を奪われていたら、彼もチラッとこちらを見たのです。柔和な微笑みの奥に秘めた、ただ者ではないオーラ。あの凄みは、一朝一夕のキャリアで生まれるものではありません。抗いがたい悪の魅力！一瞬の陶酔！

生涯忘れられない一瞥に出逢った、タオルミナの夕暮れでした。